

## 想像力とテロル

——村上龍『半島を出よ』と日米未来戦記

野中 潤

### 一、大塚英志が語る 9・11

二〇〇一年九月十一日(火)、日本時間午後十時三分、テレビの画面の中で、世界貿易センタービル南棟に大型旅客機が衝突した。北棟に最初の旅客機が突っ込んでから約十八分後の出来事だった。当時、日本時間午後十時過ぎというところ、テレビ朝日系列のニュース・ステーションやNHKのニュース10など、視聴率が高い報道番組が放送を開始した直後の時間帯である。ブラウン管の中で起きている出来事の輪郭を正確に捉えられないまま、虚構と現実のあわいに心を漂わせているうちに、二機目の飛行機の衝突場面に遭遇してしまったというのが、テレビの前にいた多くの視聴者の実態だったように思う。二つの超高層ビルから

煙が出る様子をテレビで眺めながら、「ハリウッド映画みたいだ」というような感覚にとらわれた視聴者も多かったはずだ。

まんが原作者の大塚英志も、『キャラクター小説の作り方』講談社現代新書・二〇〇三年二月)の中で、次のように述べている。

あの日、テレビモニターで二機の飛行機が高層ビルに突っ込む様子を見て、あなたは「これはまるで映画みたい」とは思いませんでしたか？ そう感じたことを敢えて言葉にすると亡くなった人たちに不謹慎な気がしますが、しかし、今回の「戦争」の本質を考えるにはこれは重要な手続なのです。少なくともぼくは映画みたいだと感じました。

大塚英志は、自分と同じような感慨を抱き、「映画『アルマゲドン』を思いだしてしまっただ」と書きつけた島田雅彦のエッセイ注<sup>1)</sup>を引いた上で、さらに次のように続けている。

「アルマゲドン」では小惑星でした。「デュー・インパクト」もやはり小惑星でした。「ID4」ではUFO、ハリウッド版「ゴジラ」では怪獣がアメリカの大都市を破壊しました。ぼくたちはそれらの映画であの光景とそっくりの光景をあらかじめ見てしまっていました。島田雅彦さんが書いているように「アルマゲドン」ではアメリカ人宇宙飛行士が小惑星を破壊します。「ID4」では大統領自らが戦闘機で戦いに勝利します。しかし問題なのはまさにこの点にあるのです。

世界貿易センタービルが崩れ落ちる光景をハリウッド映画のように感じたぼくたちは、だからこそ心のどこかでこの事態がこの後もハリウッド映画のように推移することを期待してしまっただけではなかったでしょうか。それが今回の「戦争」における本質だとぼくは考えます。

「写実」を唱えた日本の近代小説が、現実を模倣することでフィクションを成立させたのだとしたら、現実がフィクションを模倣するという新しい事態が出現したのだというのが、どうやら大塚英志の見立てである。ゲームと現実の区別がつかなくなった少年が犯罪をおかすという俗説と同じように、「アルマゲドン」や「ID4<sup>注二</sup>」のようなハリウッド映画と現実との区別がつかなくなった大統領が、「大量破壊兵器の存在」を口実に戦争を仕掛けたというわけである。たしかに、アメリカ人や日本人の中には、ハリウッド映画のような展開と結末を求めて事態の推移を見守っていた人たちが少なからずいたと思われる。少なくとも事件後の数週間は、「自由と民主主義の国」によって卑劣なテロリストが制圧されるという物語が、西側諸国に住むおおかたの人々の「期待の地平」だったのでないだろうか。アメリカ資本主義を象徴する高層建築物が崩壊する姿を、イスラム社会の人々を中心とする反米意識を持った人々がまったく別の物語の中に回収しようとしていたであろうということは

あるにせよ、大塚英志の指摘はおおすじで妥当だと言わざるを得ない。

ただし、大塚英志の見立てとは異なり、現実がフィクションを模倣するという事態は、何れも「9・11」に始まったことではない。

## 二、未来戦記のなかの日米戦争

『黒船の世紀』（小学館・一九九三年六月）の猪瀬直樹は、ペリー来寇以来の日米関係のゆがみを、「未来戦記」に照明をあてることで見事に分析している。猪瀬によると、日露戦争から日米開戦までの間に日本で出版された日米未来戦記は、数えられるだけでも五百冊を越えるという。その中には、雑誌『新青年』創刊号の目玉であった樋口麗陽の「第二次世界大戦 日米戦争未来記」（大正九年一月号）七月号のように、かなり有名なものもある。また、『少年倶楽部』に連載された宮崎一雨の「小説日米未来戦」（大正十一年一月号）大正十一年二月号のような子ども向けの日米未来戦記<sup>注三</sup>もあった。『黒船の世紀』で特に詳しく紹介されているのは、一九〇九年明治42年にアメリカ人のホーマー・リー（Homer

Lee）によって書かれた『無知の勇氣』<sup>注四</sup>と、水野広徳が匿名で発表した『次の一戦』（大正三年六月、金尾文淵堂）の二冊である。水野広徳は、戦記物としては記録的なベストセラーとなった日露戦争の記録『此一戦』明治四四年三月、博文館）の著者である。

『無知の勇氣』と『次の一戦』は、いずれも日本とアメリカが太平洋を舞台に戦争をするという想定で書かれている。しかもそれぞれ自国の敗戦を予想している。仮想敵国の脅威を強調し、自国民の注意を喚起することが刊行の目的であったと考えるとよいだろう。

猪瀬によると、明治末から昭和にかけて多くの日米未来戦記が書かれたのは、この二つの著作の影響によるところが大きいという。だとすれば、真珠湾攻撃の数十年前に、アメリカ人と日本人の想像力が描き出した二つの「未来戦記」が、五百冊以上もの著作として拡大再生産されていたということになる。

たしかに、フィクションの世界を模倣するかのようになり、一九四一（昭和16）年十二月八日、現実の日米戦争が始まった。小説に描かれた恋愛をモデルに近代日本人が「ロマンチックラ

「ブ・イデオロギー」を生き始めたように、もしかすると、未来戦記をモデルに現実の戦争が起ったと考えていいのかもしれない。

### 三、『半島を出よ』が描く近未来

村上龍の『半島を出よ』上・下(二〇〇五年三月、幻冬舎)は、「反乱軍」と称する北朝鮮の特殊部隊が、漁船を擬した小型船で上陸し、福岡ドームを武力占拠した上で九州の独立を要求するという「近未来小説」である。人質をとった「反乱軍」に対して日本政府は、犠牲者が出るような強攻策をとることができない。また北朝鮮の部隊が「反乱軍」を名乗っている以上、北朝鮮本国との交渉も意味を持たない。人命尊重を金科玉条とし、脆弱な危機管理体制しかもたない日本政府が右往左往しているうちに、事態は進展し、「反乱軍」による九州統治が既成事実と化していく。

こんな風に紹介するとかかなり奇想天外な小説に聞こえるかもしれないが、巻末に記載された膨大な資料を渉猟して描かれたという小説世界は、読むほどに「リアル」である。少なくとも、テレビの中で目撃した浅間山荘

事件や地下鉄サリン事件などと同じ程度には「リアル」に感じられる。

たとえば、北朝鮮は、上陸作戦に先立つて大規模な陽動作戦を行う。一ヶ月あまりの間に延べ二千隻以上もの小型船を日本の領海に向けて出航させるのだ。繰り返される領海への出航に、海上保安庁や自衛隊の感覚が鈍磨することをねらつての作戦である。テポドンや不審船をめぐる不可思議な事件を記憶していて、拉致事件などに関するワイドショー的な情報を知悉している読者にとつては、いかにもありそうな話である。

また、福岡沖の小島に上陸した九名の精鋭部隊は、用意した円でチケットを買ってフェリーに乗り換え、なんなく福岡に侵入する。これも、海上保安庁や自衛隊の目をかいくぐって日本に上陸し、小型船で日本人を朝鮮半島に連れ去つたという拉致事件について知っていれば、きわめて現実味を帯びた話である。

九名の特殊部隊は、火器を手に福岡ドームに侵入する。そして満員の観客に対して館内放送で福岡ドーム制圧を宣言する。その直後のホークス応援団の男の言動は、次のように描

写されている。

なんばしよつとか、このバカ野郎が。その男が手に持った拡声器で、キム・ハッスのほうに向かってそう叫ぶと、笑い声と、そうだ、そうだ、という声があちこちで上がった。

ホントに北朝鮮から来たとか。嘘やろ。そしたら横のねえちゃん喜び組か。ひげの男がそういうことを言うのと、外野席の観客までがどつと笑った。警備員も笑っている。観客も警備員も、ひげの男の言葉が滑稽だから笑うのではない。緊張や恐怖から目をそむけたいから笑うのだ。

津波などの脅威が間近に迫っていても、事態を安全な日常性の文脈の中で受けとめ続け、危険を認識できない状態に陥るといって「日常性のバイアス」を想起させる場面である。目前の脅威から目をそむけている観客の日常性は、RPGと呼ばれる携帯型のロケット弾によつて粉碎される。威嚇のために発射されたRPGが、ドーム内の巨大スクリーンの半分を吹き飛ばすのだ。目の前で展開される試合を野球放送的なコードに基づいてフィクショ

ナルなものに変換する装置の破壊は、きわめて象徴的である。テロルによって観客がへいま・ここという別の現実を引き戻される瞬間が、フィクションな現実を作り出す装置としての巨大スクリーンの破壊として見事に形象化されているからである。しかも日本人のフィクション的な意識を象徴する巨大スクリーンは、コンピュータ・ゲームでおなじみのロール・プレイング・ゲームと同じ略称をもつロケット推進擲弾(Rocket-Propelled Grenade)によって破壊されている。ここに、錯綜する虚構と現実へのアイロニーを見て取ることもできるだろう。

構造が単純なので安く容易に製造でき、しかも威力があることから、ゲリラやテロリストによって多用されているRPGは、海上保安庁の船舶が被害を受けた二〇〇一年の不審船事件でも使用されていた。ゲリラがロケット弾でスクリーンを吹き飛ばすというと、何か現実離れた話のようだが、RPGという武器の名称が記されることによって、これまた「リアル」な描写になり得ている。

こいつら、よりによってなんで土曜日のこ

んな時間にテロをやってくれるんだろう。河合英明は、北朝鮮武装ゲリラによる福岡ドーム占拠の報に接して、まず最初にそう思った。

河合英明は、「内閣情報調査室国際部門朝鮮半島班」の官僚である。平和ボケした日本人官僚の心内語としては、いかにもありそうなお詞である。異常事態であるにもかかわらず、首相や関係官僚が都内にいないため、日本政府の対応は後手後手にまわり、場当たり的なものにしかならない。たとえば、危機管理センターに集まった官僚の一人である総務省地方援護局の飛驒が、ドームの職員からの電話を受けて酔客や暴徒鎮圧用の放水砲の使用を検討する場面などは、まったくもって噴飯ものである。ロケット弾で武装している本格的なテロリスト集団を相手に、学生のデモ隊制圧でお馴染みの放水を行ってもほとんど見戯にひとしいことは明らかだからだ。放水砲の使用を真剣に提案する総務官僚の飛驒や「どのくらいの水圧があるのか」誰が操作するのか「どこに何人武装ゲリラがいるのか

正確にわかるのか」といったような問題を真剣に検討する危機管理センターのメンバーの言動は、日本の危機管理の稚拙さの戯画である。もちろん、小説の中での話とは言え、さすがに飛驒の提案は却下されている。

さらに苦笑させられるのは、日本人になりすましたテロリストが東京に向かっているという噂が流れると、慌てた日本政府が九州を封鎖してしまうことだ。テロリストの東京侵入を防ぐために、「九州独立」という現実を日本政府が自ら積極的に作り出してしまふのだ。

日本政府が「九州切り捨て」などの場当たり的な対応に終始し、混乱している間に、約五百人の後続部隊がリーダーでは捕捉しにくいアントノフ2型輸送機で福岡に到着してしまふ。これによって、「占領統治」の基盤を作る体制がいちおう整ったことになる。

「高麗遠征軍」はさっそく記者会見を行い、「円兌換券の発行」と「政治的危険分子および重犯罪人の逮捕」を宣言する。さらには、「人民軍内の反乱将兵約十二万人」を乗せた艦船が八日後に福岡に入港する手はずになっていることも発表される。もし十二万人の武

装兵士が到着すれば、「共和国遠征軍」のハン・スンジン司令官は、敗戦後のマッカーサーのよう  
に君臨し、九州を統治し始めることになる  
はずである。

#### 四、ストックホルム症候群

『半島を出よ』は、たんに近未来を描いてい  
るだけの小説ではない。描かれた「近未来」  
の中には、過去の日本、あるいは現在の日本も  
映し出されている。

たとえば、占領軍の支配下におかれた福岡  
市民のふるまいは、敗戦後の日本人とよく似  
ている。というより、敗戦後の日本人の戯画だ  
と見なした方がよいと思えるくらいだ。

最終的には十二万人にも及ぶという「遠征  
軍」の受け入れ体制を整えるために、福岡市  
長は職員を派遣する。主としてゴミや尿尿の  
処理について早急に対策を講じる必要がある  
からだ。すると、派遣された職員たちに不  
思議な現象が起る。西日本新聞の記者である  
横川から取材を受けた福岡市長は、派遣し  
た職員の間起きた不思議な現象について、  
次のように語っている。

しかしですね、納得いかないというか、よ  
くわからないのは、昨日の午後から計八名  
があつちに出向しているわけですが、聞くこ  
ころによると、遠征軍が要求する以上のこ  
とまで、嬉々としてやっているそうで、それ  
つてどういふことなんだろうと思つてしま  
まして。

遠征軍への派遣を命じられた市の職員は、  
反抗したり無気力になったりするどころか、  
「まるで十年も一緒にやっているように」北朝  
鮮の遠征軍に対して笑顔で協力し始めたとい  
うのだ。横川は、市長の話を聞きながら、「ス  
トックホルム症候群」のことを想起する。ここ  
で横川の心内語としてさりげなく持ち込まれて  
いる「ストックホルム症候群」という言葉は、小  
説世界に描かれた日本人のありようを考え  
ると、きわめて意味深長である。

「ストックホルム症候群」とは、一九七三年に  
スウェーデンのストックホルムで起きた銀行強  
盗事件で人質となった人々が、事件後になぜ  
か自分たちを救った警察を憎み、逆に犯人た  
ちをかばったという出来事がもとになって作

られた心理学用語である。自分が人質である  
という現実に対応するために犯人に対して肯  
定的な態度をとるのだが、それが過度になる  
ことよつて、本来は憎むべきはずの犯人に対  
して強い愛着や好意を持つてしまうのだ。過  
度の適応によつて形成されたこうした感情  
は、解放後も簡単に消えることはない。

福岡のテレビに出演して「高麗遠征軍」の広  
報担当としての仕事を行うチョ・スリョンに対  
して、福岡の女性たちが次のようなふるまい  
を見せるのも、「ストックホルム症候群」という  
文脈の中で理解できる。

放送局の玄関前には、チョ・スリョンの到  
着を待つ十数人の女性たちがいた。今日は  
私服なんですわね、と言いながら中年の女性  
が花を持って近づき、他にも何人か贈り物  
の箱を差し出す女性もいた。チョ・スリョン  
は、お早うございます、と頭を下げて集ま  
つたみんなに挨拶し、十本ほどのバラの花束  
を受けとつたが、贈り物の箱を受けとるの  
は辞退了。どうして受けとつてくれないん  
ですか、と三十代前半だと思われる女性は

がつかりした表情で言った。これ、わたしは今朝焼いたばかりのクッキーなんですよ。

占領軍総司令官にあてた五〇万通にも及ぶ手紙を踏まえて袖井林二郎が上梓した『拝啓マッカーサー元帥様―占領下の日本人の手紙』(大月書店・一九八五年)に描かれた敗戦後の日本人のことを連想させる場面である。袖井が紹介するマッカーサー宛の手紙には、戦勝国におもねり、占領軍総司令官にこびる日本人の「過度の適応」を見ることができ、福岡の女性たちがバラの花束やクッキーを渡そうとしたように、人形や松茸、熊の毛皮、肖像画など、じつにさまざまな「貢ぎ物」が手紙とともにマッカーサーに捧げられている。支配者に対する過度の適応が解放後も続くのだとしたら、近未来小説の中に「占領下」という過去(あるいは現在?)が映し出されているのは、当然のことなのかもしれない。

## 五、密通する政治と文学

「鉄腕アトム」を見て育ったロボット研究者たちが手塚治虫の描いた未来を現実化し始めて

いるように、すぐれた作家の想像力によって描き出された世界がテロリストによって模倣され、現実化するということはあり得るのだろうか。近未来の危機を警告するために書かれた小説が危機をむしろ招き寄せてしまうという逆説は、再びくり返されるのだろうか。

『半島を出よ』という小説を「未来戦記」として読むならば、『無知の涙』や「次の一戦」の出現が数多くの日米未来戦記を生み出し、現実の戦争に先立つて大衆の想像力の中で対米戦争が反復されていたという事実をあらためて思い起こしてみる必要があるだろう。

現に、「武力攻撃事態等における国民の保護のための措置に関する法律」(通称「国民保護法」)が二〇〇四年九月に施行され、武力攻撃や大規模テロを想定した動きが具体化し始めている。少なくとも自衛隊や警察などの公的機関による訓練やシミュレーションの中では、戦争やテロは近未来の「現実」である。今後、国民保護法に基づく国民保護計画が全国で策定されていけば、近未来の戦争やテロが訓練やシミュレーションを通じて人々の想像力の中で次第にはつきりとした輪郭を持

ち始めるかもしれない。

文学的な想像力に基づく近未来小説が抑止よりもむしろ誘発の要因になる可能性が高いのだと仮定すれば、政治にきびすを接するようにな近未来の戦争やテロのイメージをまき散らすことは、歴史の反復に加担することには他ならないのではないだろうか。

注一、二〇〇一(平成13)年九月十二日付『朝日新聞』夕刊。

注二、ローランド・エメリツヒ監督の米映画「インディペンデンス・デイ (INDEPENDENCE DAY)」。アメリカの独立記念日が七月四日であることから「ID4」と表記。

注三、上田信道「大正期における日米未来戦記の系譜」『児童文学研究』第29号、一九九六年十一月)に宮崎一雨の「小説日米未来戦」に関する言及がある。

注四、一九一一(明治44)年十月に博文館から翻訳出版された際は『日米戦争』(池亨吉訳)という書名。原題は「The Valor of Ignorance」。

(のなか・じゅん)